

日本の家族制度が抱える

「理想と実態の乖離」

『家父長制』という名の空虚な器と、倫理なき支配の終焉

2026.02.18 | 品川心療内科自由メモ

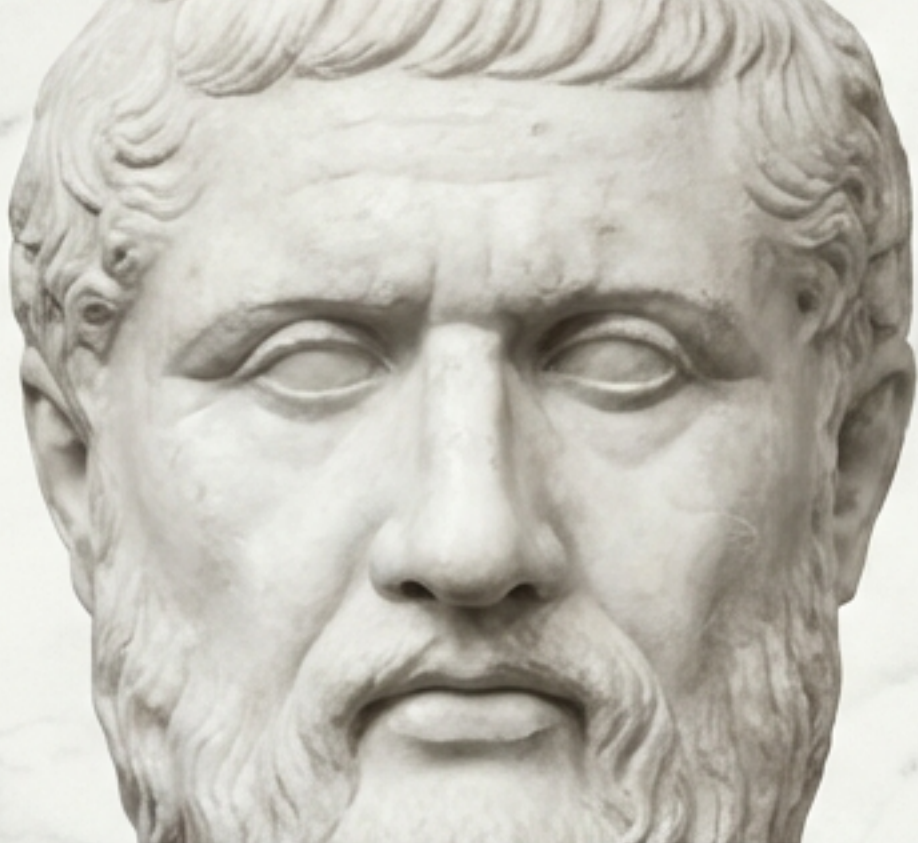
亡霊のように漂う「家父長制」という言葉

日本の家庭において、私たちはこの言葉にある種の「強大な父」のイメージを投影しがちです。

- ・ 家族を外敵から守る
- ・ 経済的に支える
- ・ 揺るぎない倫理的規範を示す
- ・ 絶対的な守護者



理想の守護者



卑小な支配者

理想の守護者か、卑小な支配者か

現実に目を向けたとき、そこに立っているのは理想の守護者などではありません。

威張る / 怒鳴る / 暴力をふるう / 恐怖で服従させる
低劣で卑小な支配欲にまみれた「生身の男」の姿です。

1. 「保護」という大義名分の消失

The Disappearance of “Just Cause”



本来、家父長制が機能する絶対条件は、父が家族に「圧倒的な保護」を与えることでした。

圧倒的な保護
(Overwhelming Protection)

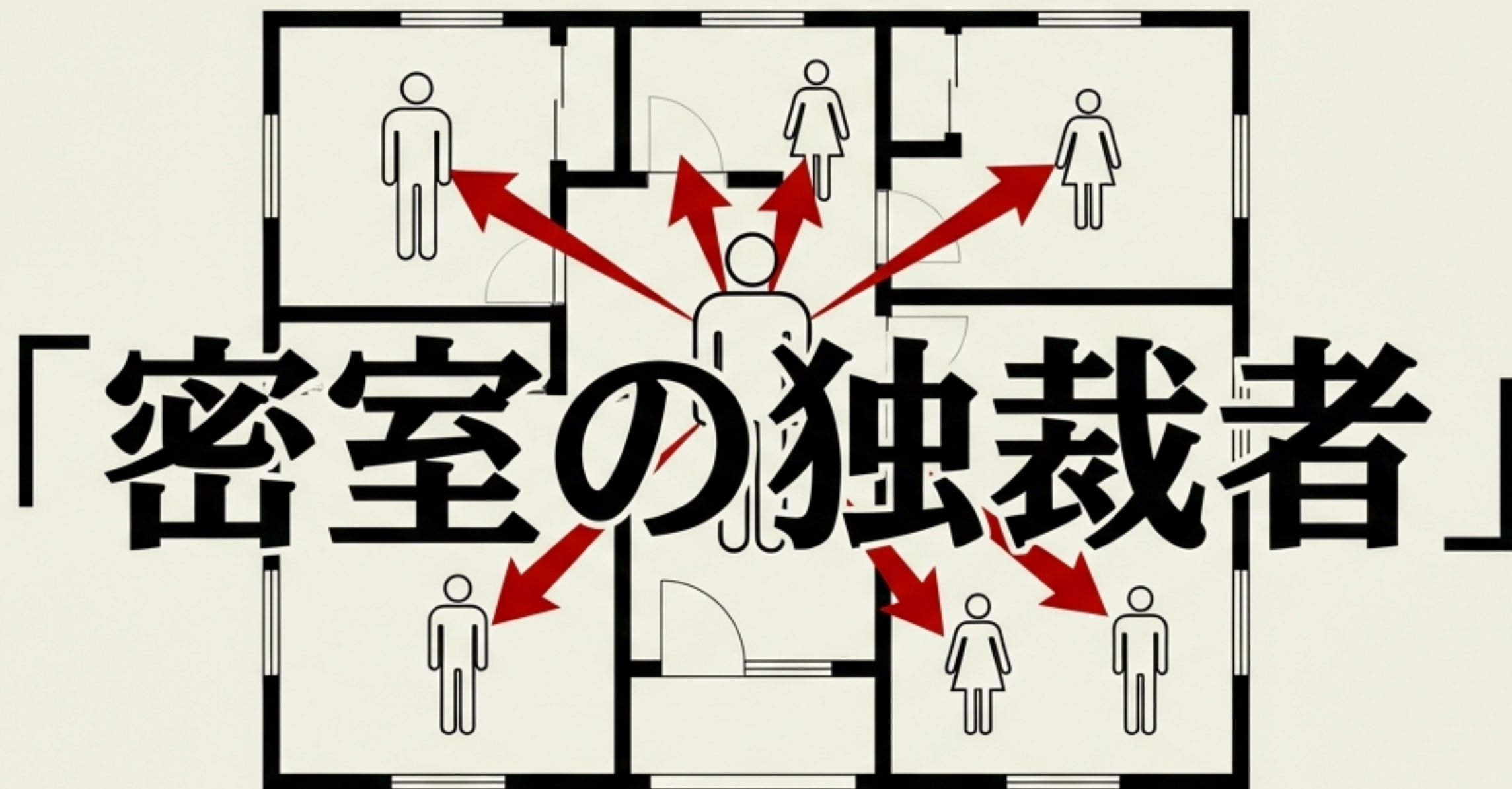


敬意と指導権
(Respect & Leadership)

しかし、現代においてこの「保護」は
しばしば「支配」へとすり替わっています。



REALITY



「密室の独裁者」

家族を外敵から守るはずの力が、家族という最も弱い存在に向けられる。
それはもはや家父長でも何でもありません。

2. 「召使に英雄なし」

No man is a hero to his valet.



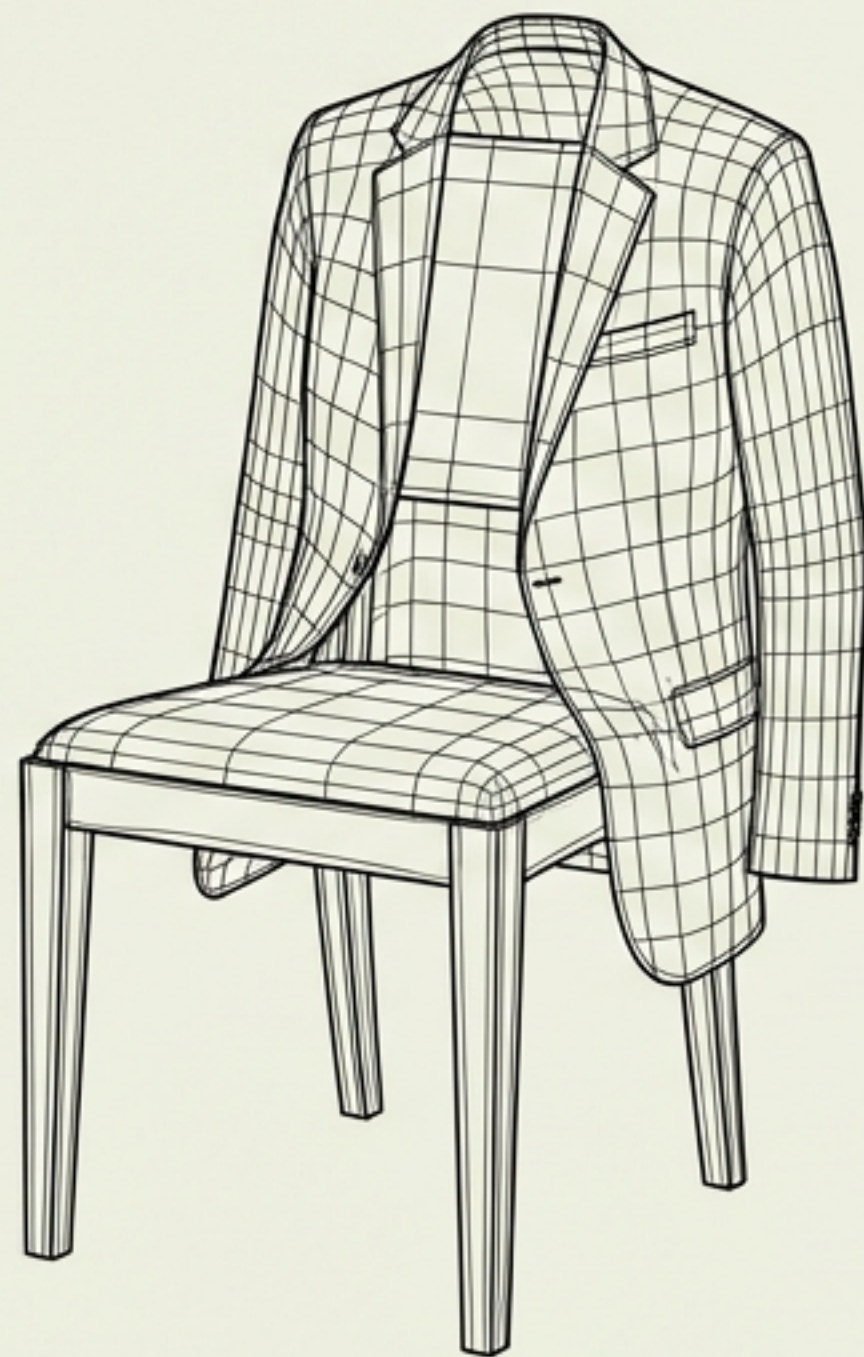
どんなに世間で英雄と称えられる人物でも、身の回りの世話をする者から見れば、欠点だらけの人間にしか見えない。

- ・いびきをかく
- ・だらしなく酒を飲む
- ・些細なことで不機嫌になる

距離が近づくほど、底の浅さが透ける

父が外でどれほど「立派な社会人」を演じていても、家庭という密室で感情を爆発せれば、家族にとって父はもはや「倫理的権威」ではあり得ません。

暴力や暴言でしか自己を証明できない姿。



3. 倫理的権威なき「支配」の末路

恐怖や迷惑、あるいは経済的な困り込みによって無理やり服従させている現状に、一体何の「正当性」があるのでしょうか。

**もはや制度ではなく、
ただの「ハラスメントの継続」です。**



そこにあるのは家族の絆ではなく、単なる「力関係の不均衡」に過ぎません。

4. 落差を埋められない「未熟な権力」



特権の享受と責任の放棄 (Privilege without Responsibility)

家父長としての特権だけを求め、精神的・倫理的な成熟を放棄する。

安易な手段による隠蔽 (The Cover-up)

理想と卑小な現実との「埋められない落差」を、**暴力**や**支配**で誤魔化す。

『家父長制』という名の空虚な器

“倫理的権威がないところに、
真の家父長制は存在しません。”



私たちが「**家父長制の弊害**」と呼んでいるものの正体は、
未熟な人間が、家庭という密室で権力を持ってしまった悲劇です。

「父だから敬え」という時代の終わり

**制度としての家父長制を
延命させる必要はありません。**



対等な人間としての信頼と対話へ

これからの家族に必要なもの



- 対等な人間同士として向き合う
- 信頼と倫理を築き直す
- 極めて個人的で地道な対話

空虚な器を壊し、生身の人間として出合い直す。